

## 音楽の散歩道 その9の1

— 演奏が世界的センセーションを起こしたピアノ独奏曲とマウリツィオ・ポリーニ —

キラメキテラスヘルスケアホスピタル | 栗 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章  
 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 栗 隆志  
 大海クリニック・大海宮崎クリニック | 大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

### はじめに

令和6年3月23日に、マウリツィオ・ポリーニ氏が死去した。謹んで哀悼の意を表します。

彼は疑いもなく、20世紀後半を代表するピアニストであり、1971年の彼の日本デビューのLPは、私達、日本の音楽ファンに、衝撃を以って迎えられた（図1）。



図1 ポリーニの日本デビューLPのジャケット(1971)

ポリーニ（1942-2024）は、イタリアのミラノに生まれ、同地の音楽院を卒業。幾つかのピアノ・コンクールで優秀な成績を収め、最後のショパン・コンクール（1960）後、間もなくから、71年のLPデビューまでの11年間は、日本では彼の名前を耳にする事は全くと言っていいほど無かったし、日本人で彼の名を覚えている人は極めて稀であった。

1970（～80）年代までは、第2次大戦前からの大巨匠や、キャリアを積んできたピアニスト達が目白押しで、コンクールで優勝（入

賞）したからといって、現代のように世の注目を浴びる事など無かった（日本では、欧米とは事情が全く異なる事は言うまでもない）。コンクールを機に研鑽・経験を積み、コンサートやLPの発表などで頭角を現わすのが一般的であった。

当時は、コルトー、リヒテル、ルーベンシュタイン、ミケランジェリ……など、既に世界的名声を博しているコンサートの審査員達が、未だ現役ばりばりのピアニストであったり、音楽界の指導者達だったからである。

唯一の例外は、冷戦時代の第1回チャイコフスキー・コンクールで優勝したクライバーンくらいであろう。

58年の優勝帰国後のニューヨークの紙吹雪の舞う凱旋パレードは、愛機「スピリット・オブ・セントルイス」で大西洋横断に成功したリンドバーグ以来のものであった。

米国が、メンツを取り戻したのである。

彼の優勝の決定には、フルシチョフの許可が必要であったと言われる。

この前年(57)、ソ連はスプートニク1号に続き、2号(「ライカ」という名の犬を搭載)の打ち上げに成功した。つまり、人工衛星と宇宙船の打ち上げに成功したのである。宇宙開発競争でアメリカを大きくリードしたフルシチョフの名声は頂点にあった。

フルシチョフは、ソ連の優越感・余裕を誇示する為、あえて優勝を許可したのである。だが結果として、このコンクールの名は世界に広まる事となる。

(一方、対抗意識を燃やしたアイゼンハワーの「マーキュリー計画」につづき、ケネディは、「アポロ計画」を表明し、推進する事になる。69年、アメリカは有人月着陸に成功。アメリカの威信を取り戻した。それから約50年、現在、当時と同様の事が繰り返されている。)

余談だがこの頃私は習字を習っていたが「右はらい」で、最後の右へ静かに筆を抜く所が巧いかないと、中野先生に「これはライカ犬の尻尾」と笑われ、何度も書き替えさせられた事が懐しく思い出されるほど、ライカ犬は有名であった。

コンクールは、常に音楽以外の政治的、商業的、名利的あるいは、審査員の都合や力関係や社会情勢などで、順位が左右されてきたように思える。得点やタイムなどで勝負を決めるスポーツなどと異なり、芸術はファジーだからである。好みの問題である。

さて、ここで歴史的な大ピアニスト達の死

亡した年号を確認しておこう。

### (1) 1945年以前(戦前)

フェルッチョ・ブゾーニ(24)、レオポルド・ゴドウスキー(38)、セルゲイ・ラフマニノフ(43)

### (2) 1950年代

ディヌ・リパッティ(50)、アルトゥール・シュナーベル(51)、イーヴ・ナット(56)、ワルター・ギーゼキング(56)、ヨーゼフ・ホフマン(57)

### (3) 1960年代

クララ・ハスキル(60)、エドウィン・フィッシャー(60)、アルフレッド・コルトー(62)、ウィルヘルム・バックハウス(69)

### (4) 1970年代

サンソン・フランソワ(70)、ロベール・カサドシュ(71)

### (5) 1980年代

グレン・グールド(82)、アルトゥール・ルービンシュタイン(82)、エミール・ギレリス(85)、リリー・クラウス(86)、ウラディミール・ホロヴィッツ(89)

### (6) 1990年代

クラウディオ・アラウ(91)、ウィルヘルム・ケンプ(91)、ルドルフ・ゼルキン(91)、アルトゥーロ・ベネディティ・ミケランジェリ(95)、スヴャトスラフ・リヒテル(97)

本稿では、ポリニーに敬意を表し、

〔1〕第2次大戦後から今日まで、ピアノ音楽愛好家に、その演奏のLP、CDが、衝激を与えた9(10)点のピアノ独奏曲を紹介するが、その中にポリニーの2点が入った事は、特筆に値しよう。

更に〔2〕ポリニーとバレエ・リュスに関し述べる。然し結果的には、〔1〕がやや長文となったので〔2〕は、次回にまわした。

## 〔1〕演奏が世界的センセーションを巻き起こした戦後のピアノ独奏曲のレコード

ここに紹介するのは、あくまで私の独断で選んだレコードで、わずか9枚しかない。

これらの中には、一発屋などと様々な悪評を受けたものもある。

然し、リアル・タイムにそれらのレコードに接した事がなく、過去の著作や聞きかじりで書かれたものなど、低レベルでいいかげんな論評が実に多い。

評論家の意見は参考にはなるが、音楽は自分の耳で聴き、確認して判断する事が大切であろう。数十年前の車やコンピューター、携帯電話などと、現代のものを比較して、現代のものの方がずっと優れていると自慢してもナンセンスな事であるのと同じである。

古く、音質の悪い録音もあるが、できれば良好な再生装置で再生する事が好ましいし、その再生音を、現代の録音技術で録音された音に頭の中で変換し、鑑賞する能力を養っておく事も重要であろう。

### (1) ディヌ・リパッティ、50年9月16日の「ブザンソンでの最後の演奏会」より「ショパンのワルツ集」

パリ音楽院でピアノをコルトー、指揮をシャルル・ミュンシュ、作曲をナディア・ブーランジェらに学んだリパッティ(1917-50)は、ナチスから逃れ、ジュネーブ音楽院の教授として演奏活動をしていたが、白血病に罹患した。

当時、リウマチの特効薬として脚光を浴びていたコルチゾン注射は、1日50ドルと非常に高価であった。

師の指揮者ミュンシュ(本誌4月号の20世紀の大指揮者, No.6), メニューインやファンが、数ヶ月分の注射代を集めたが33歳で死去。

死の2ヶ月半前にEMIの名プロデューサー、ウォルター・レグ(フィルハーモニア管弦楽団創始者, 夫人はE. シュワルツコップ)が、ロンドンから録音機材を持ち込み録音。ワルツは順不同で演奏されたが、最後の1曲(第2番)は力尽きて演奏できなかった。

後に妻マドレーヌは「あの人には、もはや最後の1曲を弾く力が無かったが、ショパンでさえ、それを許した事でしょう」と記している(図2)。



図2 リパッティ最後の演奏会(1950)  
写真上:ブーランジェと共に  
下:コルトーと共に

### (2) ウラディミール・ホロヴィッツ、51年4月23日のカーネギー・ホールのライブ録音と47年12月のビクター・スタジオ録音の「ムソルグスキー/ホロヴィッツ編の展覧会の絵」

ウクライナのキーウ生まれのホロヴィッツ(1904-89)には、話題となった名演は数知れない。

ただ多彩な音色と力強さに満ち、彼の圧倒的力量を見せつけた、甲乙つけ難いこの2つの歴史的演奏は、聴衆の耳目を驚掴みにする

(図3)。

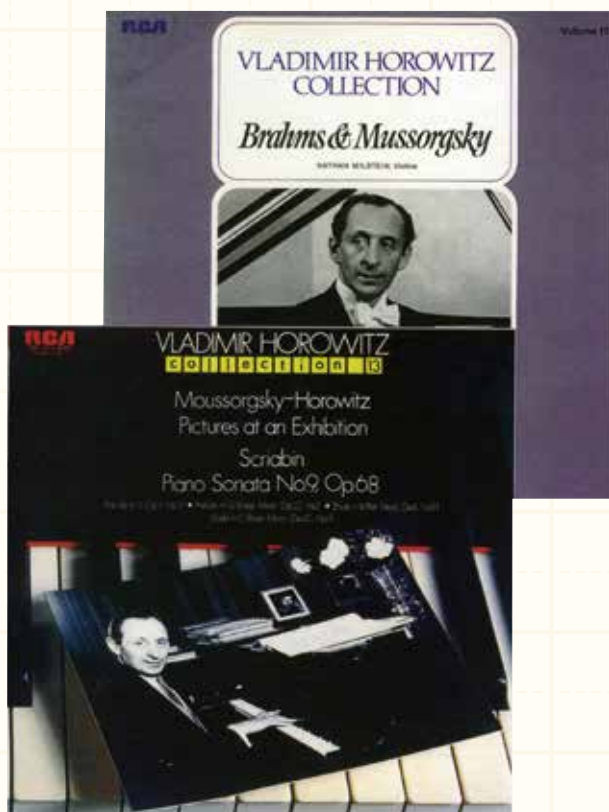


図3 ホロヴィッツ編の「展覧会」のLP  
上は1947年,下は1951年盤

### (3) グレン・グールド, 55年の「ゴールドベルグ変奏曲」

カナダのトロント生まれのグールド(1932-82)は, 50歳の若さで死去した。

彼は生涯に, バッハを中心に多数のLPを遺した。

彼の名を世界的に有名にした第1作目のLPが, これである(図4上)。

彼は, 特異な演奏姿勢とハミングと言うか, うなり声, 楽譜の個性的解釈, コンサートの否定とドロップ・アウト宣言等々, 常に音楽界に挑戦し, 刺激を与え続けた。

62年4月6日のバーンスタインとの「ブラームスのP協奏曲第1番」の極端に遅い彼のテンポ設定などに対し, バーンスタインが演奏前に, 観客に, (テンポなど) 自分の本意ではないと, その経緯を説明する約4分間のスピーチもあった。その間, 聴衆は軽くだよめき, 大声で笑い, スピーチ後は盛大な

拍手が続き, 厳かに曲が始まった(図5)。

ショーンバーグは, バーンスタインの指揮者としての責任を激しく追及し, グールド坊やの演奏技術を揶揄した(その時の演奏時間は, 53分10秒, 最短記録は, ラザール・ベルマン, ラインスドルフの44分とも言われていた)。

話を戻そう。このグールドに影響を与えた



図4 「ゴールドベルグ変奏曲」  
上:グールド(1955)  
下:ロザリン(1978)



図5 論争を起こしたバーンスタインとの共演(1962)

のが女流ピアニスト、ロザリン・チューレック（1914-2003）であったとよく言われる。それは確かだろう。

グールドと「ゴールドベルグ」とロザリンに関しては、機会があれば将来、詳細に述べる。ここで、ロザリンについて若干述べる。

プロコフィエフの7番などを弾くグールドを見ていると、彼はかなりの演奏技術を持っていた事が窺えるが、ロザリンは疑いもなく、それ以上であった。

彼女は生涯に7回の「ゴールドベルグ」を録音した事でも知られる。6回がピアノで、3回目の78年のみが、ハープシコードである（図4下）。これは個人輸入したLPで、日本で発売されていないLPは、当時度々、私達は個人輸入していた。つまり、彼女は当時、日本であまり知られていなかった。然し彼女は若くして大ピアニストだった。

図6は、1936-37シーズンのストコフス

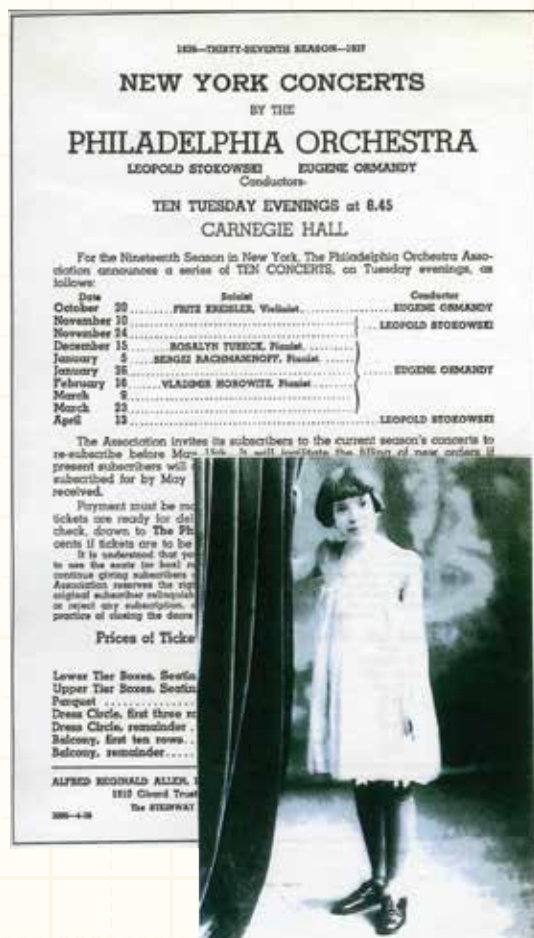


図6 歴史的演奏家と共に選ばれた22歳のロザリン。写真は9歳のロザリン

キー、オーマンディ指揮のフィラデルフィア管弦楽団のカーネギー・ホールでの定演の予定表である。独奏者は4人選ばれている。

1人目はヴァイオリニストのクライスラー、残りの3人は、ラフマニノフ、ホロヴィッツ、それに驚くべき事に、22歳になったばかりのロザリンである（図の少女は、オーケストラ・デビューした時の9歳の彼女）。

1年後には、彼女は6夜のバッハ・リサイタルも行っている。こんな彼女から若きグールドがインスピレーションを受けたのも当然だろう。続きは別の機会で。

#### (4) スヴァトスラフ・リヒテル、58年2月25日の「ソフィア演奏会」での「展覧会の絵」

ホロヴィッツと共に、20世紀を代表するウクライナ出身のリヒテル（1915-97）は、ウィーン音楽院でピアノを学んだ父およびモスクワ音楽院で、ネイガウスに学んだ。

自身ピアニストのプロコフィエフは、自作のピアノ・ソナタの初演は、自分で行っていたが、第7番の初演を初めてリヒテルにまかせた（43）。

更に彼は、プロコフィエフ60歳の誕生日に第9番の初演も行った。この9番は後にリヒテルに献呈された。偉業である。

リヒテルは、鹿児島文化ホールでも公演したが、彼の晩年のスタイル、暗い会場の中、ピアノ近くのわずかの照明の下で、楽譜を見ながらの演奏には、大家の風格が感じられた。

58年、ブルガリア、ソフィアに於る、彼の初めてのソ連外での、一連の歴史的演奏会の圧巻がこのLPである（図7）。

前記のホロヴィッツとは異なる、リヒテルの力量が如実に示される。録音は極めて悪い。



図7 「ソフィア演奏会」での「展覧会の絵」(1958)

(5) マウリツィオ・ポリーニ, 71年のストラヴィンスキー「ペトルシュカからの3楽章」とプロコフィエフ「ピアノ・ソナタ第7番」

(6) マウリツィオ・ポリーニ, 72年のショパン「練習曲, 作品10,25」

なお(5)(6)は, 次回〔2〕で述べる。

(7) ラザール・ベルマン, 63年のリスト「超絶技巧練習曲集」

サンクトペテルブルグ出身のベルマン(1930-2005)は, 50年代にリスト・コンクール1位などを果し, ロンドンなどで活動していたが, その後, 世界の表舞台から姿を消した。コンクールの受賞など, ほとんど意味を持たないのが, 実力の世界, 欧米である。然し, 彼が63年に録音したこの曲集は, 欧米では広くうわさになっていた。

そして, 76年のセンセーショナルな「伝説的なラザール・ベルマンのアメリカ・デビュー」が実現した。H. ショーンバーグは, 演奏会での彼の演奏を賞賛している(図8)。

同年, この曲集は, 欧米や日本で新譜として発売された(図9)。

(ジョルジュ・シフラは, 57-58年に既に, この曲集を録音している, 図10)

シフラから約40年後, 日本人もこの曲集を録音できるようになった。



図8 ベルマンとジュリーニ(1976)



図9 ベルマンの「超絶技巧練習曲集」(1963)

私のCD棚には, 横山(98), 青柳(01), 大井(02), 小菅(02), 上野(03), 紗良・オット(08), それに鹿児島では御馴染のフレディ・ケンプ(01)がある。

でも, これらのCDの存在意義は, どこにあるのだろうか, とも思う。

この前まで、日本の演奏家は、リストの曲を無視するか、けなしていた。あれは何だったのか？でも、このようにCDがリリースされるようになったのは、喜ばしい。



図10 シフラの「超絶技巧練習曲集」(1957-58)

**(8) アーヴィン・ニレジハージ (ニアレジハージ), 「プレイズ・リスト」から73年の「伝説, 2曲」**

音質にうるさいリスナーが、世界中に反響を巻き起こしたこのLPを聴くと腰を抜かすかもしれない。

車の録音などで音質が最悪のこのLPの音源は、教会でのライブをアマチュアが、カセットで録音したものである。逆に言えば、このカセット録音が話題になるほど、彼の演奏の特異性を如実に示している(図11)。

ハンガリー生まれのニレジハージ(1903-87)は、幼少時からの異常に卓越した音楽能力により、高名な心理学者の研究対象となり、その成果は、「音楽的天才の心理学」として出版され、今日でも、その世界では、重要な文献であると言われる。

20年代中頃までには、彼の名声は世界屈指の大ピアニストと言われるまでに、頂点に達した。当時生存していたリストの高弟等や(35年のシェーンベルグの手紙も含め)多くの著名作曲家などに絶讃されている。然し彼

は、やがて忘れ去られていった。

彼が突然、ピアノ音楽界で脚光を浴びたのが、70歳の時のこのカセット録音である。

興味深いこの録音を残しただけで彼は、(リストの)ピアノ演奏史に、特別の位置を占めたと言えよう。

H. ショーンバーグは当時、「20世紀を生き続けている、真に19世紀的ピアニストを聴けるなんて、夢にも思わなかった」と言ったようである。



図11 カセット録音のニレジハージの「伝説」(1973)

このLPの発売後、何十年も練習もしていない、長期ブランクのこの老ピアニストに、商業目的の音楽会社などが、多くの曲の演奏を録音したようである。

当然、彼本来の演奏ができない事は、火を見るより明らかである。

彼の演奏会や録音を聴き、当時高名な日本の作曲家や、絶頂期のピアニストが失礼な発言をしているような記述を目にする事がある。全く大人気無<sup>おとなげ</sup>い。そんな事なら、最初から演奏会に行かなければいいのだ。

もちろん彼の演奏スタイルを記録に残そうと言う人や、彼の演奏を賞賛するピアニスト達も沢山いる。

世間の評価など、時の流れと共にコロコロ変わる事を、音楽関係者は常に認識しておく

べきである。

40年位前、日本にブーニン・ブームを巻き起こした彼のドキュメントを最近テレビで観た（2回目）。

彼の事を耳にしなくなって久しい。彼が病氣、ケガと格闘していた為であった。ドキュメントの内容は、夫婦で努力を重ね、再起した彼の日本での演奏会までの話がメインであった。

ファンで満員の演奏会のシーンは、ブームの時にも増して、テレビを観ている私にも、ある意味、感動的であった（本当の事を言えば、私は、商業主義に満ちたブームの頃のブーニンには全く関心が無く、全く知らない）。

会場の観客は、ブーニンの演奏に「よく頑張ってる、いい演奏だった」と感じ、応援する人ばかりだと思ふし、彼の演奏技術を批判する人は一人もいないだろう（一言付け加えれば、1990年頃に購入した彼の「バッハ・リサイタル」は、選曲も良く、私の愛聴盤の一つである。図12）。



図12 ブーニンの「バッハ・リサイタル」(1990頃)

演奏家は年齢を重ねる毎に、健康上の問題も含め様々な理由で、好むと好まざるとに拘わらず、演奏する曲目、演奏スタイル、曲へのアプローチなどを変化させていくに違いな

い（いわゆる「左手のピアニスト」も多い）。

然し、アプローチは異なれど、演奏の根底にある生得の個性を変える事は、多分、不可能であろう。個性を失えば、演奏自体が芸術的意義を失う事になる。自動演奏ピアノのように（それも個性のうちと言われれば、それまでであるが）。

(9) アルトゥーロ・ベネディティ・ミケランジェリ, 71年のドビュッシーの「映像第1, 2集と子供の領分」

説明は略す（図13）



図13 ミケランジェリのドビュッシー

以上、戦後、センセーションを起こした、クラシックのピアノ独奏曲のLPは、ここに挙げた9枚だけで、80年以後はない。演奏が均質化し、個性ある演奏が全く無くなったからであろう。（つづく）